

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水域

NO. 10 幸せの国 ブータン



国際空港があるパロの裏通り。生活雑排水は垂れ流し、し尿は腐敗槽処理のみ



首都ティンプーのラグーン式処理場。周辺は住宅の開発が進んでいる

10月9日から4泊6日の旅程でブータンを訪問した。訪問団の主催は日本技術士会上下水道部会で、1996年以来ほぼ毎年海外研修を実施しており、今回で20回目となった。ブータンを旅するには色々と規制があり、訪問する機会はなかなか無いし、私の生業である水インフラ取材を実施できるためには、関係者・関係機関の協力なしではあり得ない。という判断で、この機会に同行させていただいた。昼間の便ならバンコクで1泊しなければならないし、夜行便なら一晩を要するので、往復に2日かかり、ブータンでの実質活動期間は4日間ということになる。

ブータンと言えば、GDPやGNPではなく、「GNH」、即ち、Gross National Happiness 国民総幸福量（又は、幸福感）を、真っ先に思い浮かべる人が多い。それが誤解されながら拡大して、「ブータンは幸せの国」という固定観念ができてしまい、ブータン・ツアーをセールスする旅行会社や、たまにブータンを紹介するマスコミが「幸せの国」を煽っている。

セールス・トークは、「物質文明、資本主義、情報化社会、競争社会に疲れたあなたを癒してくれる、どこかホッとさせる原日本の風景」という決まり文句である。

まず、「GNH」という理念（あくまで、理念。実現できている訳じゃない）がどこから来たのか。平山雄大（早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター助教）が、お馴染みの『地球の歩き方 ブータン』（ダイヤモンド社）に「GNHの誕生」という一文を寄せており、ボランティアセンターのWebサイトにも、GNH誕生の歴史的考察を記している。

それによると、1976年（昭和51年）12月、スリランカのコロンボで開催された第5回非同盟諸国会議に出席した、当時21歳だった4代国王が、会議後の記者会見の席上、GNHという理念を初めて語った、というのが日本において定説化した、と指摘している。そして、日本のマスコミが「この時の発言は驚きと共に世界中に報道された」「以来、国造りの柱になっている」と喧伝したが、いくつかの不審点がある、と具体的に指摘している。

それを証明するいくつかの事実を指摘した上で、4代国王がある記者会見で、「GNPはどれくらいか？」と聞かれ、答えに窮して、「GNPを信じていない、GNHが重要だ」と記者を煙に巻いたのではないかと指摘しており、結論として、「GNHという国家開発目標に試行錯誤しながら取り組んでいる。GNHの最大化を成し遂げた国ではない。GNHという概念そのものが最初から完成されたものではなく、次代と共に進化してきたのだ」と指摘している。

「地球の…」もWebサイトの文章も、短文ながら新聞記事を始め、当時の記録を丹念に検証し、事実に基づいた筋金入りと言えるレポートとなっている。

GNP、GDPが低いから不幸せとは言わない（言えない）が、ブータンの4日間で見ただ首都・ティンプーの街は、容赦なく情報機器が入り込み、インド・タタ（スズキ）の小型自動車はひしめき、猛烈な建設ラッシュの風景だった。しかも、市の中心部から川沿いに10Km程南に下った地点にあるラグーン処理方式のBABESA処理場の周辺の開発は凄まじいと言えるほどのものだった。そして、お決まりの臭気に対する苦情が住民から寄せられ、処理場の改造を実施せざるを得ない状況になっている。

1960年代～70年代の中国の都市における自転車ラッシュ、現代のハノイやホーチミン市におけるバイク・ラッシュを飛び越して、小型自動車が街路に溢れている。ほとんど、平地が無いという地理的条件も、それを加速させているようだ。自転車やバイクで移動できる地形ではないからだろう。

中国による「冬虫夏草」の買い上げ、日本によるマツタケの買い上げにより、現金が容赦なく入り込み、経済のグローバル化が急速に進んでいる。そして、すべての工事現場は、インドから流入したカースト最下層の人間によって、施工されていた。ブータンにおいて極貧の中に置かれても、彼らにとってはインドで暮らすよりはるかにマシな暮らしができると聞いた。

多くの日本人はなぜ、「幸せの国」と信じるのだろうか。